

嬰兒の哺育

R. H. 生



子供を有たる、婦人方で、必ず心得置かるべき事の數多ある中にも、分けて大切なるは子供の病氣の事でありませう。實際醫學上から見れば病氣と名づくべきものではなくて、普通の子供が極く侵され易い病徵がありませう。之は一般の婦人方が普通經驗せらるるところでありませう。してこの病徵たるや決して本當の病氣ではなくて、一時の發作に過ぎず、三四時間も経てば全く恢復して何の苦みをも感じないやうになるものですから、母たる婦人は豫て此事を御承知になつて居れば決して驚

きなさるには及びません。如何に健康な小兒でも此種の苦痛に侵されたいものは少ない位であります。乳のみ兒は其母の健康状態によりて、大に其健康及び發育に影響せらるゝものであります。幸にして母たる婦人が温和で、自制力が強く、規律的で、過度に働かず、飲食に注意し、物に怒らず、身體頗る健康でありますならば自然に其子の健康も勝れ、發育も充分に理想的なることが出来、性質も至つて順良に保持せらるゝものであります。之に反して母たる婦人にして不幸にも性質がいぢけ、心に平和がなく身體の働作其度を失し、不規則にして起臥時なく、飲食に攝制なく、健康一向に勝れない場合には、其胸に抱かれ其乳を飲む小兒も、従つて其母より何の元氣も與へらるゝことが出来ず、健康も勝れず、發育も充分なることが出来ません。要するに小兒の健康は一に其母の健康状態の如何によるものであります。小兒に乳を飲まさうとするに當りて母たる婦人が餘りに疲れて居るか、餘りに興奮されて居るやう

な場合には暫く見合せた方が良い、若しそんな場合に常の如く乳を飲ませますならば、其結果として往々其小兒を意地悪くなし、或は熱發させることがあります。母親が怒つて居る時に其乳を小兒に飲ますれば小兒は大變な病氣になる事があり、時としては其爲めに死ぬことさへもあります。少し大袈裟な言ひ振りではあるが、若し母親が其心柔和でなく、身體強健でないならば直ちに其小兒の神經に響きを與へて其發育を害し、健康を損ふことになりませう。

身體強健にして發育其宜しきを得たる嬰兒は、生後數週間は一晝夜二十四時間の中二十時間だけは眠つて過ごし、其睡眠中は極く静かで自然であります。而して残りし四時間の中に乳を飲み、手足を延べ、發育成長するものであります。

生後數週間は嬰兒が乳を飲みながら眠るやうな事がありません。睡眠中は其胃が決して擴張しませんから、乳を飲むことが不規則になつても、必ず一定量

以外に飲み過ごして胃を悪くするやうなことはありませぬ。生れたての嬰兒の胃には三四勺より多く容ることが出来ませぬから、乳を饜に容れて飲ませるやうな場合に(主として牛乳などは、毎度此分量で規則正しく與へねばなりません。そして其適當分量が自然に規則正しくなり、之が習慣となれば、もう其分量以上には分泌されないやうになるものであります。

嬰兒の肝臟は、其體の大きさ及び他の諸器關の大きさに比し甚だしく大きいものであるから、右側の乳房で乳を飲まして居る時に小兒が苦痛を覺える様な事が屢々あります。之れは肝臟の重量が一杯になつてゐる胃を壓下するによりて此苦痛を與へるのであります。故に右側の乳房で飲ました後で小兒が騒ぎ出す様な事のある場合には、右の腕の下に足をあてて、左側の乳房で飲ませるやうにし、臥かせる時には右側を下にすれば其の苦痛を治すことが出来ます。

嬰兒時代には病氣の徴候によりて起る精神上の苦痛と、肉體上の苦痛とは少しも關係を有つて居ませぬ。

せん。休むにも時なく、眠ることも出来ず、哭き叫び痙攣性の感激によりて酷く苦められて居りながら、一晝夜少しも其何故たるやの徴候さへ見へない事もありません。また強健なる小兒に於ては苛烈しき神經的感激が、恰も普通の病氣にでも侵されたかと思はるゝ様な徴候を呈する事も往々あります。之等の事は母親たるべき婦人が豫て心得置くべき事でありませう。

小兒は元來大人よりも體温が高いので、少し病氣にでも罹ればズツと熱が高まるから、豫て之を知らない人々は小兒が大した病氣にでもかゝつたかのやうに驚かざるゝものであります。小兒の時には些細な病氣にかゝつても非常な體温が高まることがありませうから、そんなに驚くには及びませぬ。齒の生へる間、殊に齒が齧を破つて出る時には、大抵華氏の百四度或は百五度位の熱が出ます。三四歳位の強健な小兒は、毎朝九十九度位の熱が出るものが往々あります。幼兒の脈は睡眠中にならざれば殆んど計ることが出来ません。また小兒は大人よりも呼吸の度が速いことを知ら

ねばなりません。二歳以下の小兒は一分間に三十回の呼吸を致します。即ち大人よりもズツ多いのであります。尙少しにても不快になれば更に呼吸の度が速められて来ます。

舌が白くなるのは通常發熱か、消化不良か、或は苛烈しき刺戟の徴であり、舌が紅く、乾いて、熱くなるのは口や胃や喉の徴であります。小兒が烈しき熱に侵さるゝのは大抵は食ひ過ぎか消化不良のものを食つた結果であります。

私の經驗によれば消化の良い食物を適度に與へられ、休息を充分にする小兒は、齒が生へる時にもサシテ苦痛を感じませぬ。稀に苦痛を感ずるところとがありましても至つて軽い痛みであります。齒が生へる時には必ず熱が發するものとは限りませぬ。齒の生へる時分は小兒の腦が著しく啓發されつゝある時でありまして、胃が適當に其作用をなさず、或はいやが上にも無茶につき込まれると云ふ風である、其結果腦及び各々組織が刺戟を受けて遂に熱を發するやうになるのであります。普通大人の腦は全身の大きさの四十乃至五十分の一で

ありますが、齒が生へ始むる頃の小兒の腦は、其體の大きさの八分の一と云ふ比でありますから、些細な攪亂でも直ぐに心身に刺戟を與へるものであります。

食べた物を吐く事は、若しそれが長く續くものでなければ單に體内の小變化に過ぎませぬ。通常過度に積み込まれた胃の重荷を軽減して居るか、或はいさせさまきで食ひ込んだ食物が胃の中で無茶苦茶に攪亂されたので、それと外へ出して居るのであります。また餘りひどく小兒を搖り動かしますと胃の中を攪亂すばかりでなく、腦を震盪して甚だしく之を刺戟しますから、ひどくは之を搖らないやうにしなければなりません。

食せ過ぎたとか、不良の物を食はしたとか、又は齒が生へかゝつて居るとかを思ひ出す間もあらず、急に發疹の出る事があります。

若しや小兒が瘦せ衰へて青白く、大さくもならぬいやうな場合がありまますならば、それは其食物が同化して居ないのでありますから、早速其原因に注意せねばなりません。そして早速其食物を可良な

ものと變へねばなりません。小兒の皮膚が擦り剥けるのは、通常手巾を取換へる時に能く乾いて居なかつた爲めか、または濕つた手巾を餘り長く換へてやらなかつた爲めかであります。消化不良も皮膚の剥ける原因となりまます。消化不良も食物を變へるか、または適當の藥

を與へなければなりません。嬰兒は何か原因なしには決して泣きませぬ、無論母か子守りか側に付いて居て貰いたい爲めに泣く

こともありますが、其哭き様により、病氣の爲めか、氣持の悪い爲め苦しんで哭くのかは容易く聞き分ける事が出来まます。

嬰兒は常に多量の水分と新鮮なる空氣とを要します。故に之が保育の任に當るものは毎日適度に之等を與へねばなりません。また缺乏を感じた時には嬰兒の方で哭き叫んで其要求の意を訴へまます。

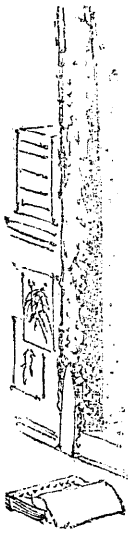
嬰兒は毎日戸外に連れ出して心地よげなる新鮮の空氣を呼吸せしめ、また屢々戸外で眠らすことも

せねばなりません。私の知つて居る一人の小兒は其初め至つて微弱な體であつたにもかゝはらず、

常に乳母車に乗せられ、體を暖く包まれて、毎日二回宛睡眠の爲めに玄關の外に寝かされて居たところか、間もなく大層丈夫な體となりました。無論上には風のあたらないやうに軽い被覆をせられて居ました。

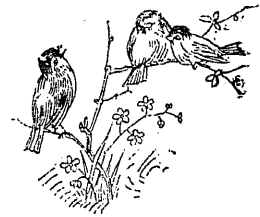
牛乳で育てられる嬰兒が秘結する事がある場合には其乳に食鹽を一滴み入れて飲ますれば往々全治する事があります。

嬰兒には何時も充分暖かなやうに着せて置かねばなりませぬ。さうして着せ過ぎてはいけない。何時も其着物は能く乾いて着心よさやうにして置かねばなりません。また食物を適度に與へ、其心身を攪亂しないやうにし、其睡眠を妨げないやうにせねばなりません。斯くしてこそ其報いとして小兒の心も健康も共に勝れて日増しに幸福と愉快を増し加へらるゝことが出来ます。



婦人と家政

栗竹孝太郎



男女兩性は互に異なる特長と天職とを有して居り又育すべきであるは云ふまでもない。此點に就いて希臘の哲學者プラトンの想像説は、男女兩性調和の必要を最も能く説明せる話と見られる。其説に依れば原始の時に於ける人類は、男子と女子とは分たれずして、男性女性の兩部共に一人に合體し、一人にて男兼女たり、夫兼婦たるものなりしが、斯く兩部が混和結合して一體を成せるが爲に、兩性の一致完全にして、従つて人類は莫大なる幸